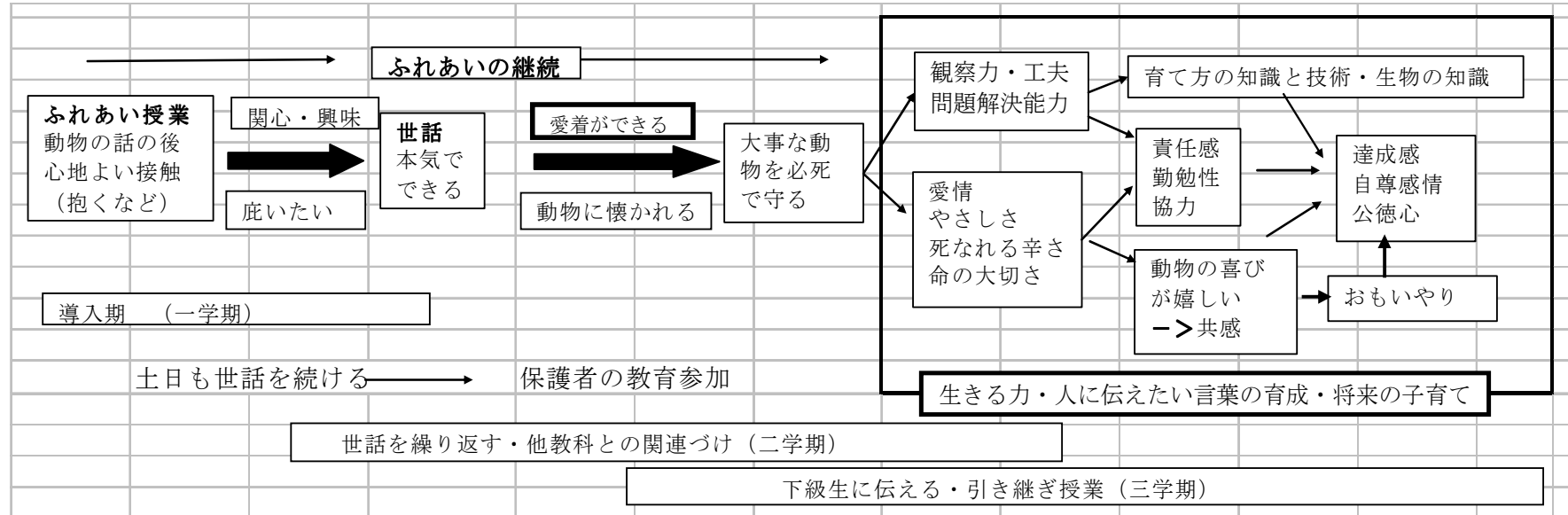


子どもの成長への飼育活動の影響の流れ

下図のごとく、子どもがその動物に「愛着」をもって初めて、様々な影響があらわれ、感情の醸成、文章を書く力の育成、あるいは将来の子育てまでつながる可能性が出てくる。



<図：飼育活動が子どもに与える影響の流れ>

その「愛着」を培うためには最初の飼育導入ガイダンス「動物ふれあい教室」で、動物の体と心を気遣わせながら「心地よい接触」を体験させることが重要である。また、前掲の作文抜粋からも見てとれるように、掃除の辛さが動物を守る喜びになり、作業を工夫し、ともに活動を楽しむようになる時期は、1学期からの「世話とふれあい」を半年間継続して、これらの作文が書かれた2学期（10月）ごろである。そして3学期には、大事な動物たちの世話を下級生に引き継ぐため、体験してきた活動をまとめて注意点や大事なことを伝える「振り返り」を行う。

学習指導要領解説書生活科編には、「2年間の目当てを持って継続飼育を行う」とあるが、上図に示した最低一年間にわたる一連の流れを学年全体の児童に与えるためには、指導者が教育的目的を持って、「何の動物をどのように飼い、どのように子どもに与えるか」を意図して、動物飼育を教科として体験教育に位置付けることが重要だろう。

中川美穂子「愛着を培う飼育体験に欠かせない動物ふれあい授業のあり方」—総合的学習に位置付けられた学年飼育としての—
全国学校飼育動物研究会誌 14号特集